

男子ハンドボール競技におけるバックコートプレイヤーが コンタクトを受けた時のシュートについて —フランス代表と日本代表とを比較して—

服部 友郎 (201211952、ハンドボールコーチング論)

指導教員：藤本 元、會田 宏、山田 永子

キーワード：コンタクト、3歩、ドリブル

【目的】

現在の世界トップレベルのハンドボール競技において、選手は大型化し、攻防でのコンタクトは激しくなっている。そのため、形態的に恵まれていない男子日本代表チーム（以後、日本）にとって得点力の向上は大きな課題となっている。一方、男子フランス代表チーム（以後、フランス）は、現代の男子ハンドボールにおいて最も得点力のあるチームの一つと評されている。

そこで本研究では、フランスと日本を対象に、バックコートプレイヤーがディフェンス (DF) からコンタクトを受けた時のシュートプレーを比較することにより、日本の得点力の向上を有用な提言を得ることを目的とした。

【方法】

本研究では、近年、男子世界選手権においてバックコートプレイヤーが DF からコンタクトを受けたシュートプレー（フランス 175 シーン、日本 141 シーン）と受けていないシュートプレー（フランス 83 シーン、日本 134 シーン）を分析対象にした。分析項目を以下のように設定した。

- (1) コンタクト状況（有り、無し）
- (2) コンタクトの種類（利き腕、正面、非利き腕）
- (3) 歩数（0歩、1歩、2歩、3歩）
- (4) ドリブル状況（有り、無し）
- (5) シュートプレー結果①（ゴール、ゴール警告・退場、7m、警告・退場フリースロー）
- (6) シュートプレー結果②（有効なプレー、フリースロー、有効でないプレー）

統計処理はカイ 2 乗検定と残差分析を行った。

【結果と考察】

1. シュートプレーにおけるコンタクトの有無
コンタクト有りの割合はフランスが日本に比べて有意に高いことから、フランスは DF にコンタクトされながらシュートプレーを行っていることが考えられる。
2. シュートプレーにおける歩数
3 歩の割合はフランスが日本に比べて有意に高く、

2 歩の割合は日本がフランスに比べて有意に高いことから、フランスは DF をかわすために 3 歩使用してシュートプレーを行おうとしていること、日本は 3 歩使用する前に早くシュートプレーを完了していることが考えられる。

3. シュートプレー結果②

コンタクト有りの状況での有効でないプレーの割合は、日本がフランスに比べて有意に高いことから、日本は DF のコンタクトの影響を大きく受け有効でないシュートプレーが多いことが考えられる。

4. コンタクトの有無と分析項目との関係

フランスはコンタクトの有無とゴールとの間に有意な関係が認められなかった。日本はコンタクト有りの状況のゴールはコンタクト無しの状況に比べて有意に少なかった。これらのことから日本はシュートプレーにコンタクトの影響を大きく受けると考えられる。

5. コンタクトの種類と分析項目との関係

フランスは非利き腕からのコンタクト時にドリブルを使う割合が利き腕側と正面からのコンタクト時に比べて有意に高かった。一方、日本はコンタクトの種類とドリブルの間に有意な関係が認められなかった。これらのことから、フランスは非利き腕側からのコンタクト時に利き腕側へ移動しようとしてドリブルを使うことが考えられる。

【結論】

(1) フランス

シュートプレーにおいてコンタクトを受けることが多いこと、3 歩使用することが多いこと、非利き腕側からのコンタクトを受けた時にドリブルが多いことが明らかとなった。フランスはシュートプレーにおいてコンタクトを受けながら歩数やドリブルを有効に使用していることが考えられる。

(2) 日本

シュートプレーにおいてコンタクトを受けることが少ないこと、3 歩使用することが多いこと、コンタクト有りの状況のゴールが少ないことが明らかとなった。日本はシュートプレーにおいてコンタクトの影響を大きく受けていることが考えられる。